物語類題和歌集の存在

―伝二条為忠筆四半切の紹介と検討―

田中　登

一

作歌の手引書たる類題和歌集は、分類題を設定し、その題にかなった例歌・証歌を集めて成ったもので、平安期の古今和歌六帖、鎌倉期の夫木和歌抄などがよく知られているが、素材を勅撰集所収歌に限定したものに、八代集部類抄・二八明題和歌集・続五明題和歌集などの存在が挙げられる。

しかして、同じ勅撰集歌を素材としながらも、読者の便宜をよりいっそう図るために、「五月雨」なら「五月雨」という語が、五七五七七の何句目に使用されたか、句ごとに分類して例歌・証歌を集めたものに、撰集歌句部類抄（撰句抄とも）がある。

同書の編者は未詳ながら、古今集から新勅撰集までの歌を集めていることから、新勅撰集が成立した嘉禎元年（一二三五）の後、あまり時を隔てないころに成立したものと推測される。しかして、この撰集佳句部類抄の影響のもと、書名・編者ともに未詳の、素材を物語中の歌に求めてなった類題集も存在することが、近年の古筆切の調査によって明らかになったので、ここに報告・紹介する次第である。

二

同書については、かつて「中世における物語和歌享受の一様相」[1]と題して、簡単に紹介したことがあるが、まずは、次の断簡から。もと四半形の冊子本で、料紙の大きさは縦が一九・七センチの横が一五・三センチ。歌は一首二行書きの一面十行詰。書写年代はおおよそ鎌倉の末期といったところであろう。

【断簡A…田中蔵】

我あきはてぬつねならぬよに
うきものといまそしりぬるかきりあれは
おもひなからもそむきけるよを

世中

初句

世の中のあさきせにのみなりゆくは
きのふのふちのはなとこそみれ

第二句

わかゝくてうき□のなかにめくるとも
たれかはしらん月のみやこに

一首目の「我あきはてぬ」は源氏物語の御法巻の光源氏の歌。二首目の「うきものと」は狭衣物語の巻四の宰相中将の歌で、ここまでは「世」という語が第五句に使われている例歌というのであろう。三首目の「世の中の」は大和物語第六十一段の御息所の歌で、四首目の「わかゝくて」は源氏物語の手習巻の浮舟の詠となっている。しかして最初の二首は「世」という語を第五句に持っている歌の並びの箇所であろう。

なお、当該断簡は伝称筆者が平経親となっているが、これ以外の切（断簡B～F）の筆者はすべて二条為忠となっているので、今後は、伝称筆者を古筆の世界では馴染みのある為忠で統一することにしたい。

三

次は藤井隆氏蔵の断簡。大きさは縦が二一・六センチの横が一二・三センチ。断簡Aと比較して、二行分ほど裁たれていることが知られよう。こちらは、断簡Aと違って、各歌頭に出典となった物語名ないしは巻名が小字で記されている。おそらく断簡Aの場合も本来は記されていたものが、伝来の過程で削り去られたのであろう。

【断簡B…藤井隆氏蔵】

大　秋の世をまてとたのめしことのはに
　　いまもかゝれるつゆのはかなさ

みのり　いにしへの秋さへいまの心ちして
　　ぬれにしそてにつゆそおきそふ

てならひ　こゝろにはあきのゆふへをわかねとも
　　なかむるそてにつゆそみたるゝ

さ衣二　たつぬへきくさのはらさへ霜かれて
　　たれにとはましみちしはの露

一首目の「秋の世を」は大和物語の百十五段の右大臣の歌。二首目の「いにしへの」は源氏物語の御法巻の致仕大臣の歌。三首目の「こゝろには」は源氏物語の手習巻の浮舟の歌。四首目の「たつぬへき」は狭衣物語巻二の狭衣の歌となっている。しかして各詠歌中の五句目を吟味すれば、この四首は「露」という語を第五句に持っている歌群と知られよう。

以上の断簡A・Bは、かつて「中世における物語和歌享受の一様相」と題する拙稿で紹介したことがある。

四

次の断簡は、右記の拙稿を公にした折に、伊井春樹氏より御教示いただいたもの。寸法は不明だが、一面完存で、全文は以下のとおり。

【断簡C…岡田家伝来古筆手鑑】

おほつかなさのほともへにけり

第二句

さころも　ふきはらふよもの木からし心あらは

二　うきなをかくすくまもあらせよ

第三句

さ衣　ゆふくれのつゆふきむすふ木からしや

身にしむあきのこひのつまなる

雲

初句

□あはせ　雲のうへにおもひのほれるこゝろには

一首目の「おほつかなさの」は源氏物語の賢木巻の朧月夜の歌。二首目の「ふきはらふ」は狭衣物語の巻二の女二宮の歌。三首目の「ゆふくれに」は同じく狭衣物語の巻一の狭衣の歌。四首目の「雲のうへに」は源氏物語の絵合巻の大弐典侍の歌となっている。一首目の「おほつかなさの」の詠は「木からし」という語を初句に持っている歌で、以下、それを第二句、第三句に持つ歌へと続く箇所ということになろう。

五

次の切は久曽神昇氏の『源氏物語断簡集成』[2]から。同書でこの切を「源氏物語和歌」として扱っているのは、切に見える二首の歌がたまたま二首とも源氏物語中の歌であったためであろう。ともあれ、同書の解説によれば、寸法は縦が二五・六センチで、横が九・四センチ。全文は次の六行となっている。

【断簡D…『源氏物語断簡集成』】

第四句

松かせ　いくかへりゆきかふあきをすこしつゝ
うきゝにのりてわれかへるらん

第五句

てならひ　こゝろこそうきよのほかをはなるれと
ゆくゑもしらぬあまのうきゝを

一首目の「いくかへり」は源氏物語の松風巻の明石君の歌で、二首目の「こゝろこそ」は同じく源氏物語の手習巻の浮舟の歌。一首目が「浮き木」という語を第四句に持つ歌で、二首目はそれを第五句に持つ歌ということになろう。

六

以下に紹介する断簡E・Fは、ごく近年になってその存在が知られたもの。まずは断簡Eから。大きさは縦が二二・六センチで、横が一五・一センチ。全文は以下の十行となっている。

【断簡E…田中蔵】

雲井の空のむつましきかな
かしはき　ゆくゑなきそらのけふりとなりぬとも
おもふあたりをたちははなれし
かしはき　いまはとてもえんけふりもむすほゝれ
たえぬおもひのなをやのこらん
うはそく　みし人もやともけふりになりにしを
なにとて我身き□のこりけん
夕きり　のほりにしみねのけふりにたちましり
おもはぬかたになひかすもかな
さ衣一　ほかさまにもしほのけふりなひかめや

一首目の「雲井の空の」は源氏物語の夕顔巻の光源氏の歌。二首目の「ゆくゑなき」は同じく源氏物語の柏木巻の柏木の歌で、次の「いまはとて」も同断。次いで四首目の「みし人も」は源氏物語の橋姫巻の八宮の歌。五首目の「のほりにし」は源氏物語の夕霧巻の落葉宮の歌で、最後の「ほかさまに」が狭衣物語巻一の狭衣の歌となっている。しかして二首目から六首目までの第二句に注意をすれば、いずれもそこに「煙」という語を含んでおり、断簡は煙題の第二句の箇所と知られよう。

七

最後に断簡Fを。大きさは縦が二一・二センチの横が一〇・八

センチで、全文は次の七行となっている。

【断簡F…田中蔵】

第四句

さ衣三　あかさりしあとやかよふといそのかみ

ふるの、みちをたつねてそみる

原

初句

伊　くりはらのあねはの松の人ならは

みやこのつとにいさといはましを

一首目の「あかさりし」は狭衣物語の巻三の狭衣の歌で、二首目の「くりはらの」は伊勢物語第十四段の昔男の歌。断簡Aから断簡Eまでの出典となった歌を見るに、いずれも源氏・狭衣・大和の三作品で、伊勢物語の歌は一首も確認できなかったのであるが、ここに初めて伊勢の歌が採られていたことが判明したのである。一般的に、大和の歌がある以上、伊勢の歌も撰歌の対象となって当然といえば当然のことながら、作り物語の歌のみを集めて成った風葉集と違って、この類題集は歌物語の歌をも、積極的に利用していたのである。だが、そもそもの成り立ちが、作歌の手引書であるからには、歌物語の歌を採り込んでいたとしても、何の不思議もなかろう。

八

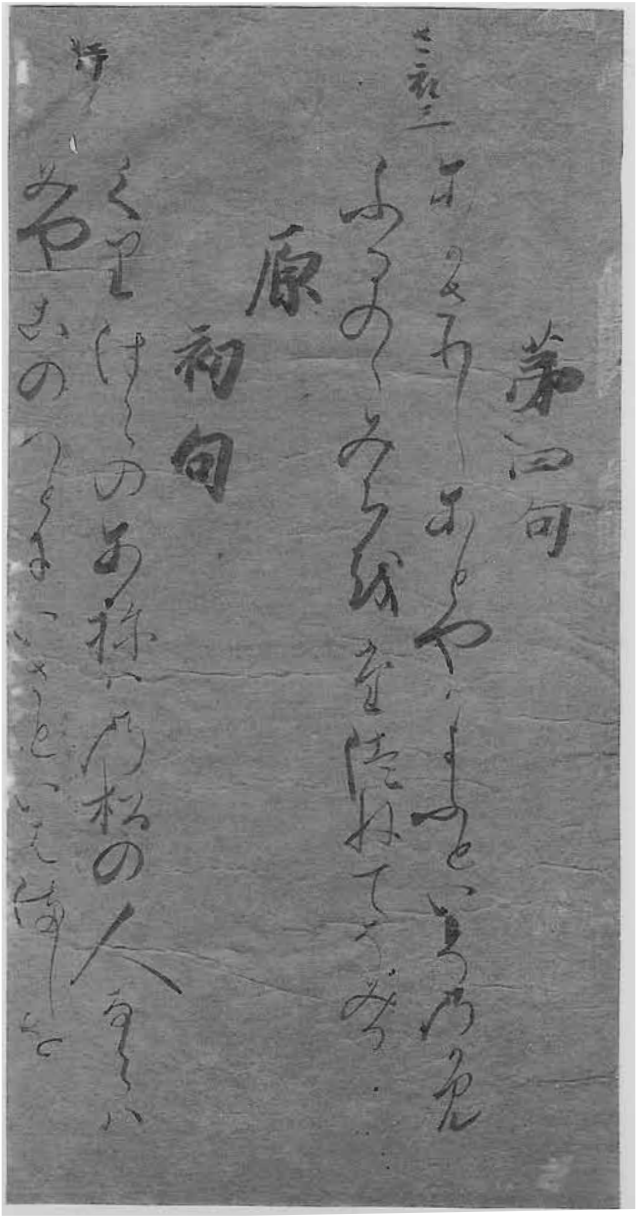
以上、二条為忠筆と伝える物語中の歌を対象として成った類題集の断簡を紹介してきたが、物語二百番歌合や風葉集に見られるように、中世という時代は、物語への関心といっても、そこに展開される和歌にことのほか強い関心が注がれていたのである。とりわけ本稿でみてきた類題集は、物語二百番歌合や風葉集が物語中の秀歌の鑑賞を目的としていたのに対して、これは物語中の歌を作歌の手引書として積極的に活用しようとする意図がうかがえよう。中世という時代は和歌の季節であったとつくづく感じさせられる次第である。

（注）

（1）拙稿「中世における物語和歌享受の一様相」（『古筆学のあゆみ』八木書店、平成七年）。後に拙著『古筆切の国文学的研究』（風間書房、平成九年）所収。

（2）久曽神昇『源氏物語断簡集成』（汲古書院、平成十二年）

（たなか　のぼる／本学教授）



断簡 F